

11.29.12.13

## えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から①

大きな衿(えり)と美しい鳳凰(ほうおう)刺しゅうが特徴で、強い存在感を放つ。宇和島市戸島の地芝居の衣裳である。戸島は、

同市沖約18<sup>+</sup>の宇和海に位置し、かつて地元青年団による地芝居が行われ、衣裳や浄瑠璃本、絵馬などが残っている。

戸島での地芝居の起源は不明だが、浄瑠璃本には明治20年代〜大正初期の墨書きがある。また衣裳は江戸後期〜明治後期の製作とされる。

この衣裳は芝居独特のもので小忌衣(おみころも)といい、公家役や高貴な武将役が着る。明治期の製作と考えられる。幅広の衿がひだ状に立ち、裾まで長く続いている。戸島に残され

## 戸島の地芝居衣裳

## 大きな衿・鳳凰刺しゅう



宇和島市戸島の地芝居に使われた「濃茶天鵝絨地桐鳳凰岩波模様小忌衣」(明治時代 県歴史文化博物館所蔵)

大きく羽根を広げた鳳凰、桐や岩、水しぶきが刺しゅうされている。鳳凰は古代中国の伝説上の鳥で、徳の高い君子の治世に現れ、桐の木にすむとされた。日本でも、吉祥文様としてさまざまな美術工芸品などに見ることができ、華やかで気品あるモチーフの小忌衣は、さぞ舞台映えしたことだろう。

戸島の地芝居は、2月の皇大神宮(こうたいじんぐう)の祭礼の際に境内で行われていた。かつては近隣の村浦に出かけて芝居をしたこともあったという。稽古は波が高くなり漁に出られなくなる冬期に、網小屋や倉庫で行った。昭和30年ごろには、小学校の教室間の仕切りを取りはらって芝居を行っていた。

衣裳は地区の寺院の衣裳蔵で保管されていた。衣裳の管理も青年団の担当で、境内に綱を張って土干しをした。かつては境内いっぱい干すほどのたくさん衣裳があったという。

このように地芝居は、地域の祭礼や暮らしに深く結びついていた。地芝居は次第に行われなくなったが、この衣裳からは芝居に取り組んだ若者たちの姿が見えてくる。

(学芸課・宮瀬温子)

〈毎月2回掲載します〉

衣裳は19日〜来年1月28日に県歴史文化博物館(西予市)で開かれるテーマ展「戸島歌舞伎と川瀬歌舞伎」で展示する。